

幼児期の死生観の生成・涵養 ——親子の対話の事例を通して

山本 佳世子*

要旨

今日、「死生観の空洞化」という事態において、死生観を育むための「生と死の教育」の必要性が指摘されている。学校での「生と死の教育」が期待される一方で限界も指摘されており、地域や家庭での取り組みも改めて期待される。では、死やいのちの理解の発達段階に応じて、「この世ならぬ世界」「この世ならぬ存在」への理解を含む死生観はどのように形成され、そうした死生観を育むためにどのような働きかけが有効なのだろうか。筆者が Facebook に残してきた筆者と息子（6 歳）の対話の事例を基に、幼児期の死生観の生成・涵養について検討した。事例からは、家庭という限られた共同体において、実生活と絵本やアニメの世界を通して、それらが互いに関連し合う形で死生の営みに繰り返し触れ、そこに含まれる価値体系が親という他者と共有されることで、死やいのちの理解の発達に応じた死生観が形成される可能性が見て取れた。その際には家庭内で共通した死生観を持っていること、それらが地域に残されている伝統的な価値体系と合致していること、子どもの死生にまつわる問いに親がごまかさずに向き合い応えられることが求められることも示唆された。

キーワード：生と死の教育、死生観

1 はじめに

1.1 背景と問題の所在

現代日本社会は、少子高齢化が進み、2025 年には団塊の世代が後期高齢者となり、多死社会を迎えると言われている。1980 年代以降、日本でも緩和ケア・終末期ケアに関する議論が活発になり、全国に「生と死を考える会」が立ち上がるなど、死に向き合い、生を考えることの重要性が指摘されてきた。1961 年に国民皆保険制度が整備され、病院が身近な存在となり、誰もが安く高度な医療を受けることができるようになった。医療の進歩もあり、

* 人と防災未来センター 嘱託研究員

在宅死の割合が減る一方で病院死の割合が増えていき、1976年には病院死と在宅死が逆転、今では8割の人が病院で亡くなっている。このような事態を「死の病院化」と呼ぶ（岡部2009）が、死の病院化が進むことで、死の医療化が進んだと竹之内（2009）は指摘する。「いかに死ぬか」ということは本来、個人の生の課題として現れるものであるはずなのに、それが医療技術的な問題になってしまっているというのである。

他方、死に向き合う儀礼儀式的形骸化・簡素化も進んでいる。都市部では儀礼儀式をせずに火葬にするだけの「直葬」が葬儀全体の2〜3割になったとも言われている（碧海2012）¹。葬送儀礼を通して、人々は死者を送り、悼み、地縁血縁のコミュニティの中で共有する死生観を形作ってきた。葬送儀礼の衰退は、死生観の生成・涵養や継承の困難を引き起こすのである。

結果、「死生観の空洞化」と言われる事態が起こっている。人々は死に向き合い、いかに死ぬかを問い、それまでの人生をどう生きるかを問う機会を失っていく。そのため、自他の死に直面した際には、「どうしたらいいかわからない」という死生観という土台を欠いた感情的な反応しかできなくなってしまうのである（竹之内2009）。そこで、これまでも、死に向き合い、死生観を育むことを目指し、「看取りの文化の再構築」が言われたり（竹之内2009）、「生と死の教育」が試みられたりしてきた。

では、死生観とはどのようにして育むことができるのであろうか。発達段階に応じた死生観の発達があるのだろうか。死生観を育むために、発達段階に応じてどのような取り組みが望まれるのであろうか。

1.2 先行研究

1.2.1 死生観の発達

子どもの「いのち」理解について、碓井（2005）は次のように述べている。すなわち、幼児期の子どもは「すべてのものに命がある」というアニミズム的な世界観を持っている。それが発達に応じて「動くものには命がある」、さらに「自分の力で動くものには命がある」、「生物だけに命がある」とわかるようになり、アニミズム的世界観から離れていくという。

一方で、「死」については、ナギー（Nagy 1948）が示したように2〜3歳頃より、「死」という現象を感じ取ることができるようになる。しかし、死の不可逆性（死んだら生き返らない）や不可避性・普遍性（誰もが死ぬ）、不動性（死んだら動かない）は理解できておらず、

¹ 以前は、直葬はホームレスなど身寄りのない場合や経済的に困難な場合に限られていたが、近年は簡素な見送りがしたい場合や経済的負担を減らしたい場合を中心に広がりつつある。

遠くへ行っていて不在なことや寝ていることと死んでいることの区別がついていない。それが5～6歳頃より、死の不可逆性は理解できるようになる。しかし、死の不可逆性・普遍性は理解できておらず、死は歳をとったり悪いことをした人のみに訪れるものであると思っていたり、自身や親兄弟といった身近な人は死なないと思っていたりする。それが小学校中学年頃、10歳前後になってようやく死の不可逆性・普遍性や不動性も理解できるようになり、大人と同様の死の理解ができるようになる。とはいえ、思春期に自他の死に直面することは、思春期特有の発達課題の中での困難があることは言うまでもない。

こうしたいのちの理解、死の理解に応じて、生と死の経験を積み重ねることが、「この世ならぬ世界」「この世ならぬ存在」への理解も含めた死生観の発達につながると考えられる²。井藤（2008）は答志島という離島における葬送儀礼のフィールドワークを通じて、村落共同体における死生観の生成と継承について述べている。すなわち、村落共同体において誰かが亡くなれば、配偶者や親、濃い人・朋友会、親戚・近所の人といった故人との関係に応じて葬送儀礼において何らかの役割を担う。故人との関係性によって役割を変化させながら、死生を巡る慣習的な営みに繰り返し参加することで、参加する人々で共有される価値体系、すなわち死生観が生まれるという。

家庭や地域において、人が老い、病み、亡くなっていく姿を目にし、葬送儀礼を通じて死者を葬り、弔い、悼み、ご先祖様や神仏と交流する経験を積み重ねていくことは、自然発生的な「生と死の教育」となり、死生観を育むことにつながるだろう。しかし、家庭や地域にそれを期待することが難しくなっている現代日本社会においては、学校教育における意図的な「生と死の教育」も唱えられるようになっている。

1.2.2 「生と死の教育」

学校での「生と死の教育」としては、中学や高校といった「いのち」「死」の理解が十分にできるようになった青年期と、その理解が未だ不十分である学童期とでは、異なるアプローチが必要となる。小学校においては、発達段階への配慮が必要となり、死への理解が不十分な時期に死の現実を突きつけることは、子どもにとってつらい経験となり、不安や恐怖を植え付けるだけのものになってしまう可能性がある。しかし、死の現実から遠ざけることもまた、生や死について学ぶ機会を奪うことになってしまう。例えば動物を殺して食べるよう

² 時にゲームのしすぎが「リセットできる命」観につながると言われたりすることもあるが、それを実証する研究はない。ゲームをすることそのものではなく、それによって他の生と死の経験ができなくなることが死生観の形成に影響する可能性はあるだろうと碓井（2005）は指摘している。

な授業があるが³、子どもたちのレディネス（学習するための心や体の準備）や死の理解に応じた事前・事後のフォローなしに行うことは危険である。そこで、小学校における「生と死の教育」としては、生と死に関する絵本の活用が提案されたり、医療者や患者、遺族等による出前授業の試みが報告されたりしている⁴。しかし、「一回限りの授業」が死生観の生成や涵養につながるかというと、それは難しく、継続的な試みが期待される場所である。

柳田邦男（2011: 12）は、自他の死を含む人生の危機において、自らを支えるものについて、以下のように述べている。

「お天道様が見ている」とか、「ご先祖様に叱られる」（略）といった類の、大いなる存在にたいする畏敬の念といったらよいだろう。畏敬すべき対象に対し、つつしみ深さの大切さを知る。お天道様や天の神の前では、ちっぽけな存在でしかないことを受け容れるのである。

そういう畏敬の念は、心の安定ややすらぎを得るうえで重要な役割を果たすものだ。では、心の安定ややすらぎをもたらすものは他にないのかというと、実はある。生まれ育った故郷の風景、幼き日に親に何十回も読んでもらった絵本、思春期に毎日口ずさんだ歌や毎日耳を傾けた曲、そして何よりも母親に抱きしめられた温もり、等々がそれだ。

それらを総称して「心の故郷」と呼ぼう。人生の途上で挫折感や自信喪失に陥った時でも、そういう「心の故郷」を豊かに持つ人や、お天道様など大いなる存在に対する畏敬の念を持つ人は、暗黒のクレバスに転落するところまで行かずに、必ず心の安定を取り戻す。振り子の玉が必ず中心線に戻るのに似て、戻るべきところに戻るのだ。

超越的存在・次元に対する畏敬の念や、繰り返し読んでもらった絵本、繰り返し聞いた曲、繰り返し目にしてきた風景等が「心の故郷」となり、危機的状況においても心の安定を取り戻すのに役立つというのである。まさに、死生観の涵養の重要性を指摘したものであるが、一度限りの経験ではなく、繰り返しの経験の重要性を指摘するものでもあろう。

³ 代表的なものに、中学校でにわとりを殺す授業を行った鳥山敏子（1985）や小学校で豚を飼い食肉センターに送って終了した黒田恭史（2003）の実践がある。

⁴ 絵本を活用した「生と死の教育」として光岡他（2003）や松尾（2005）がある。また、がんサバイバーの経験を子どもたちに話すと同時に絵本を用いた「いのちの授業」を行っているものとして種村エイ子の実践がある（種村 2000 他）。同様に当事者の立場から小学校でも講演活動をしている者として「小さいいのち」代表の坂下裕子や大阪教育大付属池田小学校遺族の本郷由美子等がいる。医療者の出前授業の実践としては小学校を含む教員対象の研修会や高校での授業を行った中井（2010）がある。

とはいえ、現実には学校教育において継続的な「生と死の教育」を行うことは決して簡単なことではない。様々な学習指導や生活指導を行わなければならない、教員自身も「死生観の空洞化」が進んだ社会の中で生き、自身も必ずしも死生に関する思索を深めたことがあるわけでもなく、死生学について専門的に学んだことがあるわけでもない。そうした中で、死生観を育むような「生と死の教育」を継続的に実施することを教員に求めるのは酷すぎるようにも思う。意図的な「生と死の教育」における地域、家庭の役割を再考することも求められるのではないだろうか。

1.3 目的

さて、筆者自身は現在、奈良市の旧市街地において6歳と3歳の男児の子育てをしている。3歳の次男は死の理解がまだほとんどできていないが、6歳の長男については、彼との対話を通じて、「いのち」「死」の理解が発達段階に応じて進み、また死生観が育まれていることを実感している。ただし、彼には友人知人や親類縁者との死別体験はない。奈良の旧市街地という寺社仏閣の多い土地柄と、大好きな絵本が大きな役割を果たしているように思われる。柳田の言う「心の故郷」を作っている最中なのかもしれない。井藤の報告した答志島の事例のような、現代日本社会においては稀有ともいえる伝統的慣習が残っている地域ではなく、一地方都市において、幼児期に家庭・地域において死生観を育むことの可能性を感じるものである。

そこで本稿では、筆者と長男の経験の事例の分析・検討を通して、幼児期の死生観の生成・涵養に関する示唆を得ることを目的とする。

2 研究方法

筆者は、長男（アキラ・仮名）との印象的な対話やエピソードをSNS（Facebook）に投稿してきた。Facebookの投稿から「いのち」「死」の理解、死生観にまつわるエピソードを抽出し、分析する。その際に、当時の状況や対話の背景、筆者の思いについては、筆者の記憶に基づき補足する。

なお、倫理的配慮として、本人が未成年であるため、保護者（父）に研究目的を説明し、同意を得た。また、内容に支障のない範囲で、地名等を変更していることがある。

3 結果

3.1 アキラの生育環境

アキラは2010年9月に奈良市内で生まれた。春日大社や大仏殿が徒歩圏内の旧市街地に住んでいる。自宅と同じ町内にある保育所に1歳6か月（2012年4月）より徒歩で通っている。徒歩数分のところに地域の氏神さまの神社があり、夏祭り等が開催されている。所属自治会で管理するものを含め、複数の地蔵堂が地域内にあり、夏には地蔵盆が行われる。その他にも、大小様々の多数の寺社仏閣が近隣に存在する。

父は関西の地方都市、母は関東の地方都市出身であり、共に奈良の出身ではないが、自然や寺社仏閣が多く、のんびりした環境が気に入って、奈良に住むこととなった。共に特定の信仰は持たないが、地域の祭り等の行事には参加し、超越的存在に畏敬の念を持つこと、お墓参りや儀礼儀式を含む死生を巡る営みに子どもを参加させることを大切なことと考えている。

絵本の定期購読をしていたりと、一般家庭としてはかなり多くの絵本を所有している。中でも母は死生学の研究者であり、学校における「生と死の教育」やグリーフケアを専門とすることもあり、死生にまつわる絵本を子どもが生まれる前から多く所有していた。父も地獄や妖怪に関する本・絵本を個人的な好みから、購入・所有している。アキラは乳児期からかなりの量の絵本を両親に読み聞かせてもらったり、自ら手に取って眺めていたりしている。また自宅にテレビがなく、流行の子ども用アニメや番組はほとんど見ていないが、DVDやYouTube等の動画サイトで本人や両親の好みの子どもの向け動画を視聴している。

3.2 アキラの「いのち」理解の発達とアニミズム的死生観

アキラは、3歳10ヶ月時に七夕の短冊に「大きくなったら電車になりたい」と書いた（図1）。本人から聞きとって母親が短冊に書いたものだが、その際に「電車に乗りたい、じゃなくて？」と確認し、「ちゃう、電車になりたいの！」と訂正されたことを覚えている。「動くものには命がある」という「いのち」理解の段階であることがわかる。この頃のアキラは「きかんしゃトーマス」や「チャギントン」⁵といった鉄道を擬人化した作品が大好きであった。

「動くものには命がある」という「いのち」理解をしている時期において、それはとても妥当なものであることがわかる。

⁵ 「きかんしゃトーマス」は鉄道模型またはCGアニメーションで製作されたイギリスの幼児向けテレビ番組。「チャギントン」もイギリスのテレビアニメ。どちらも列車を擬人化して描いた子ども向け作品である。

それが4歳8ヶ月になると、おもちゃや人形を指して「動いたらどうしよう。こわい。」と口にするようになった(図2)。「自力で動くものには命がある」という「いのち」理解に進みつつあることが窺える。おもちゃや人形は「動かない＝命はない」と理解できるようになってきているが故に、映画「トイ・ストーリー」⁶等の視聴を通して、パソコンの中ではあたかも命があるかのようにおもちゃや人形が動くことへの混乱が表現されるのである。

さらに、5歳10ヶ月になると、イベントで見た着ぐるみの人形について「本物ちゃうで。せんとくん⁷みたいなもんやんなあ」と語っていた(Facebook への記載はなし)。人間が中に入っているだけで、「人形は自力では動かない＝人形には命がない」という理解が定着していることがわかる。

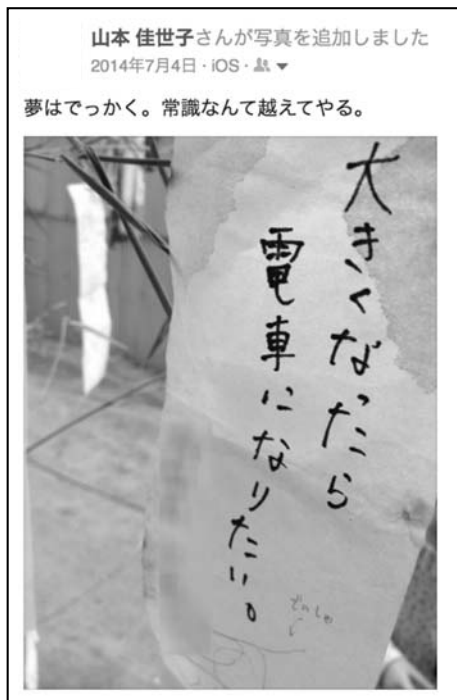


図1 3歳10ヶ月時の「いのち」理

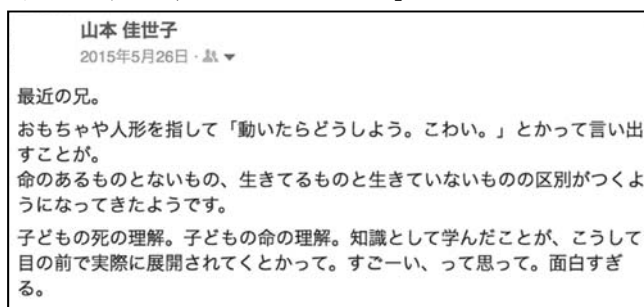


図2 4歳8ヶ月時の「いのち」理解

一方、アキラは4～5歳頃から絵本を通して妖怪が大好きになり、DVDや動画サイトで「ゲゲゲの鬼太郎」⁸を視聴したり、様々な「妖怪図鑑」を図書館で借りてきたり、父の持つ鳥山石燕『図画百鬼夜行全画集』(角川書店、2005)を両親に読んでもらったりしている。そうした中で、5歳になってから、奈良公園内の古椿の近くを通るのを怖がるようになった。生物には「いのち」があり、無生物には「いのち」がないことを理解するようになった一方で、無生物にも「魂」が宿ることがあるという理解である。こうした理解は「アニミズム的死生観」と呼ぶことができるものであろう。碓井

(2005)は「全てのものに命がある」という「いのち」理解の段階を「アニミズム的理解」と呼んでいるが、前述した「人形が動いたらどうしよう、こわい」ということと、古椿に魂が宿っ

⁶ 「トイ・ストーリー」はピクサー・アニメーション・スタジオによる1995年公開のアニメ映画。

⁷ 「せんとくん」は奈良県公式マスコットキャラクター(<http://www.pref.nara.jp/36939.htm>)。

⁸ 「ゲゲゲの鬼太郎」1960年に最初に発表された水木しげるによるマンガ作品。アニメ、映画など様々な関連作品が作られている。

ているかもしれないと恐れる気持ちは、異なるものであろう。実際、古椿を怖がった時期の少し前、4歳11ヶ月で図3のような対話をしている。

山本 佳世子
2015年8月2日・♂ ▼

誰も気にしていないかと思いますが、4歳児の地獄恐怖その後。

兄「死んだら、三途の川を渡る時の服を着せて、埋めるの？」
母「ちゃうで。死んだら焼いて、残った骨を埋めるの。焼く前に、三途の川を渡る時の服を着せるけどな」
兄「焼けて骨だけになったら、どうやって三途の川・・・」
母「魂っていうのがあってね、身体は死んじゃって、魂が地獄とか極楽とかに行くねん」
兄「?????」
母「ちょっと難しいな」
兄「・・・タマシイって脳？」
母「おおっ、まあ、そうかなあ」
(そして別の場面で)
兄「脳って何？」
母「頭にある内臓」
兄「・・・」

図3 4歳11ヶ月時の「いのち」理解

山本 佳世子
11月23日・♂ ▼

靴がかなり汚れてボロボロになったから(ちなみに小さくなったからではない)新しいのを買ってあげても。
「まだ穴空いてない。もったいない」と古いのを履き続ける兄。
ズボンに穴が開いても、可能な限り直してもらって履き続ける兄。
最近、なんとなく見えてきた理由が、本日確信に変わる。
理由、「お気に入り」ではなかった。
ゴムが伸び伸びになってずり落ちるパンツ。
母「もうこのパンツあかん。捨てるな」
兄「あかん！もったいない！妖怪が出る！」
母「大丈夫。妖怪にはならんて。まだ使えるのに捨てたら妖怪になるけど、もう履けへんやん、これ。」
兄「小学生くらいになったら履けるようになるよ！」
母「ちゃうちゃう。サイズが大きいんじゃないかって、もともとちょうど良かったのがゴムが伸びちゃったの」
兄「じゃあ、ゴム替えればええやん！」
母「いや、替えられへんし」
履き物を粗末にすると。捨てられた大量の下駄が妖怪になって「目玉三つに歯が二枚」と歌って踊る。という怪談話。が元ネタです。
兄。妖怪。大好きだけど、だからこそ怖い。
教育的効果、あります。

図4 6歳2ヶ月時の「いのち」理解

この対話をした当時「魂」というものを理解していなかったアキラだが、その後、「ゲゲゲの鬼太郎」のアニメで、人の身体から魂が抜け出て浮遊し、身体は動かなくなる場面、魂が捕らえられ閉じ込められる場面等を繰り返し観ることで「魂」ということを理解するようになっていった。また、古い道具に魂が宿って付喪神という妖怪になることを、複数の妖怪図鑑や絵本で学んだ。それが「古椿に魂が宿る」ということのアニミズム的な死生観となり、古椿を怖がるようになったのである。アキラは6歳になっても、靴や服をかなりボロボロになっても「もったいない！妖怪が出る！」とできる限り使おうとしている(図4)。靴や服に「いのち」がないことは理解しつつ、それに「魂」が宿ることがあるという、「いのち」理解の発達とは異なる死生観が見られるのである。

こうした死生観の発達は、アキラの「死」とは何かを探究することと同時に

に進んでいる。次節では、アキラの「死」の理解の発達を見ていくこととする。

3.3 アキラの「死」の理解の発達

アキラは3歳6ヶ月のある日、父と奈良公園を散策していて鹿の頭蓋骨を見つけた(図5)。同日に死について母とした対話が図6と7である。鹿の骸骨を契機に、死んだら動かなくなること、生き返らないことを、母は物理的な変化からアキラに教えようとしている。4歳1ヶ月の時の対話に図8のようなものがある。死んだら骨だけになるということは理解



図 5 3歳6ヶ月時の「死」の理解①

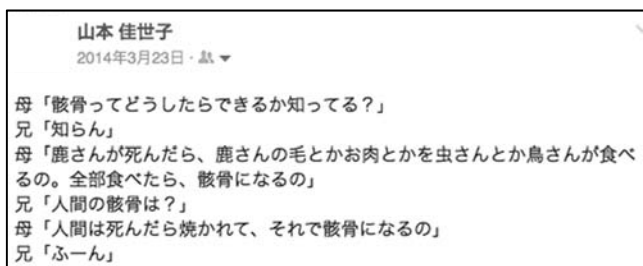


図 6 3歳6ヶ月時の「死」の理解②

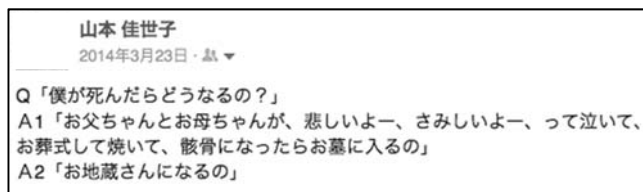


図 7 3歳6ヶ月時の「死」の理解③

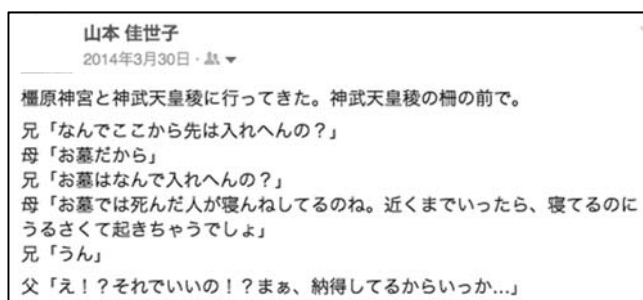


図 9 3歳6ヶ月時の「死」の理解④

できているようである。

とはいえ、実感としては死の不動性や不可逆性を理解しているわけではない。鹿の骸骨を見つけた1週間後、家族で榊原神宮と神武天皇陵に行った際の対話が図9である。「お墓では死んだ人が寝ている」「死んだ人がうるさくて起きちゃう」という説明に、父は疑問を呈しているが、アキラはすんなり腑に落ちているのは、死んでいることと寝ていることの区別ができていないことを示している。また、同時期の対話に図10がある。エビの刺身を海に戻せばまた生き返ると思っていることが窺え、「死んだら生き返らない」ということが理解できていないことがわかる。

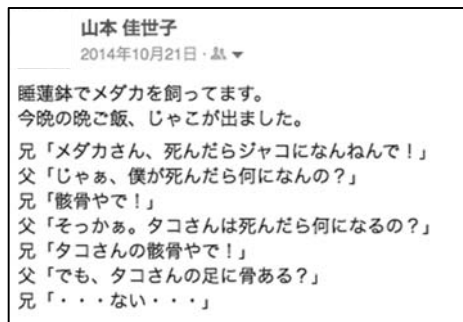


図 8 4歳1ヶ月時の「死」の理解

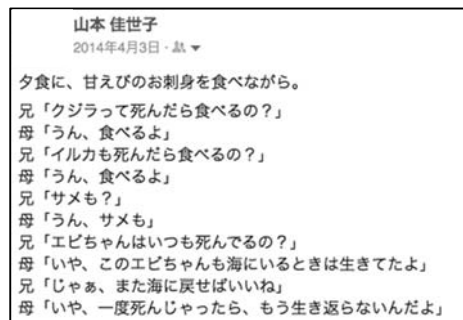


図 10 3歳7ヶ月時の「死」の理解

一方で、4 歳から 5 歳にかけて少しずつ、死ぬことへの理解を深めていっている。死を恐れる気持ちが窺える対話（図 11, 12）と、死の普遍性（誰もが死ぬ）を理解していないが故の「死」を自身の実感とは遠いところで語っている対話の両方がある（図 13, 14, 15）。4 歳 9 ヶ月時には、父が魚を捌くのを見学し、内臓の部位を説明してもらった際に、「（祖母の犬が）死ぬのを見たい」と言っている（図 16）。生物の身体の仕組みへの興味から出ている言葉であることはわかるが、死がもたらす喪失への実感はないことが窺える。そこで、「死」について扱った 2 冊の絵本『しんでくれた』（谷川俊太郎、佼成出版会、2014）と『かないくん』（谷川俊太郎、東京糸井重里事務所、2014）を母は読み聞かせている。生きるために他の命を食べることと自らの命を大切にすること、身近な人が亡くなることの喪失を描いた絵本である。しかし、この 2 冊の絵本がアキラの心に響くことはなかったようで、その後「これ読んで」とアキラから言ってくることは一度もない。「自ら選んだ本」ではなく「親の都合で与えられた本」は響かないことを実感させられたものである。

それが 5 歳半ばになってくると、死への恐れや死別の悲しみを感じさせる対話が増えてくる（図 17, 18, 19）。図 17 にある対話では、虫や動物と人間の寿命の長さの違いから、自らもいつか死ぬことへの不安と誰もが必ず死ぬという死の絶対性を否定したい気持ちが「僕、お母ちゃんと一緒に死にたい」「みんな、ずっと死ななきやいいのに」という形で表

山本 佳世子
2014年5月12日・録 ▼

兄「みんな死ぬの？」
母「うん、いつかはみんな死ぬよ」
兄「お母ちゃんも死ぬの？」
母「うん」
兄「僕も死ぬの？」
母「うん」
兄（めっちゃ不安そうな顔になって）「どうやって死ぬの？」
母「年とったら死ぬよ。あとは車に轢かれたりしても死んじゃうかもしれないから、車に轢かれたりしないように気をつけような」
兄「うん。・・・年とるの、いやや。気をつけたら年とらない？」
母「車に轢かれるのは気をつけたらいいけど、年とるのは気をつけても、みんな年とるなあ」
兄「・・・年とるの、いやや」

図 11 3 歳 8 ヶ月時の「死」の理解

山本 佳世子
2014年9月4日・録 ▼

兄「歳取るってどういうことか教えて」
母「もうすぐ4歳になるやろ。たくさん誕生日が来て、お母ちゃんは■歳、お父ちゃんは■歳、おばあちゃんは■歳、ひいおばあちゃんは■何歳かな。そうやってだんだん年取ってくと、最初はだんだん大きくなるんだけど、そのうちだんだん小さくなって弱くなって行って、そのうち死ぬねん」
兄「・・・僕は年取らへん」
母「いや、みんな年取るよ」
兄「・・・僕は死んでも生き戻るからええねん」
母「そっか。じゃあ、いいな」

図 12 4 歳 0 ヶ月時の「死」の理解

山本 佳世子
2015年1月9日・録 ▼

昨日、お風呂での会話。
兄「僕が死んだら、霊柩車で運ばれて、焼かれて、お墓に入って、夜になったらオバケになってお母さんのところに行って、おどかしてあげる」
母「うわ、会いに来てくれるの。ありがとう」

図 13 4 歳 4 ヶ月時の「死」の理解

山本 佳世子
2015年2月2日・録 ▼

兄「（母の缶ビールを運びながら）僕が大人になったら、何が好きになるかなあ」
母「一緒にビール飲むかなあ」
兄「えー。その時にはお母ちゃん、もう死んでるかもよ」
母「・・・」

図 14 4 歳 5 ヶ月時の「死」の理解

山本 佳世子
2015年10月9日・録

100均で買ってもらった「忍者刀（ウレタン製）」が大好きで、常に持ち歩き振り回してる兄。
本日お風呂上りに忍者刀を振り回しながら。
兄「オレが死んだら、俺と一緒に忍者刀も入れてな。」
母「（そこまでお気に入りなんや）うん、わかった」
兄「そんで一緒にお墓に埋めてな。そしたら地獄でも闘えるやろ。」
母「（あ、そういうことか）うん、わかった」
兄「交通事故で死んでも、年取って死んでもやで」
母「（年取ってからは私に頼んでも無理やて）うん、わかった」
地獄の恐怖に震える兄、死の恐怖はまだないようで。
そんな縁起でもないこと言わんといて！とかって言うべきなんだろうけど、
ついつい「うん、わかった。」と返事してしまう母。
この母の対応が、こんな兄の発想を助長するんだと思いつつ。

図 15 5歳1ヶ月時の「死」の理解

山本 佳世子
2015年6月7日・録

ダンナがメバルを捌くのを見学し、内臓の部位を説明してもらった後。
「■■■■ちゃん（祖母のワンコ）が死ぬの見たい」
・・・いや、それはあかなくて。
ということで、いろいろと説明してから。
まだ難しいとは思いつつ、『しんでくれた』『かないくん』の二冊の絵本を
読んで聴かせる。

図 16 4歳9ヶ月時の「死」の理解

山本 佳世子
1月15日・録

保育園から自宅までの帰り道の会話。備忘録。
兄「なんで動物と人間は生きる長さが違うの？」
母「ほんまやねえ。数日だけの虫もいれば、人間は何十年だしね」
兄「僕がお母ちゃんくらいになったら、お母ちゃんはもうどうなってる？」
母「おばあちゃんくらいになってるなあ。」
兄「僕がおばあちゃんくらいになったら、お母ちゃん？」
母「ひいばあちゃんくらい」
兄「僕がひいばあちゃんくらいになったら？」
母「死んでるなあ」
兄「（ニヤッ）」
母「（なぜそこで笑う・・・）」
兄「僕、お母ちゃんと一緒に死にたい」
母「なんで？」
兄「だって、そしたら一緒に極楽に行けるやん」
母「でも、そしたら僕は早く死ぬことになるで。お母ちゃんがおばあちゃん
になって死ぬときには、僕はまだ普通の大人やで。なのに一緒に死ぬの？」
兄「・・・みんな、ずっと死ななきゃいいのに」
母「そしたら地球上が人だらけでえらいことになるで。赤ちゃんは生まれる
のに、誰も死ななかつたら地球があふれちゃうやん。死ぬ人がいて、生まれ
る人がいるんやで」
兄「・・・死ぬ代わりに、地球じゃない星に移って住めばええやん」

図 17 5歳4ヶ月時の「死」の理解

現されている。そこでは死にまつわる（母との）別れが意識されるようになっていいる。そして、母の本棚から自ら手にした絵本『わすれられないおくりもの』（スーザン・バーレイ、評論社、1986）と『おばあちゃんは木になった』（大西暢夫、ポプラ社、2002）を読み聞かせてもらった際の対話から、まさに死別の悲しみが感じられるようになってきたことがわかる。

『わすれられないおくりもの』は「いのち教育」では使われることの多い、死生学に関する定番の絵本である。歳をとったアナグマさんが亡くなり、友だちは悲しみに暮れていたが、それぞれがアナグマさんにもあったことを思い出し、アナグマさんがそれぞれの心の中で存在し続けていることを感じるという物語である。『おばあちゃんは木になった』はダムに沈む村に住み続けるお年寄りたちを追ったノンフィクションの写真絵本である。絵本に登場するはつえさんは最後に亡くなってしまうが、著者は大好きだったトチの木の新芽を自宅のそばに見つけ、「はつえさんは木の神様になったんだ」と言うのである。人が亡くなることが悲しいことであること、しかしその後も形

を変えて存在し続けることをアキラなりに受け止めようとしている。そこで、母は「人が死んだら悲しいけど、人は死んだら妖怪とか神様になって、生きてる人間を守ってくれるねん」と伝えている。アキラは特に『おばあちゃんは木になった』の本が気に入っていて、そ

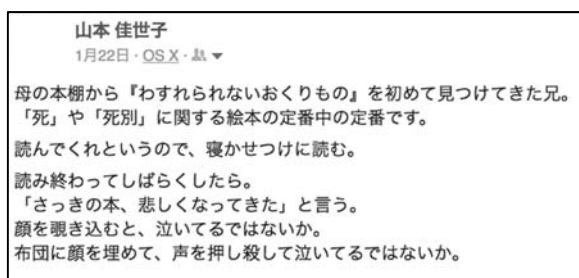


図 18 5 歳 4 ヶ月時の「死」の理解

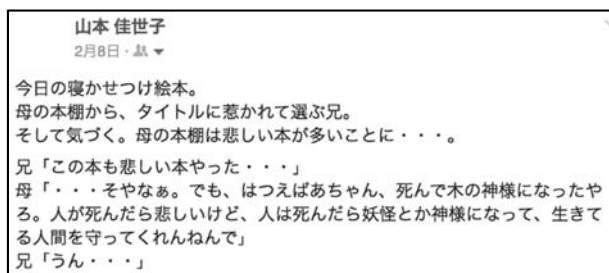


図 19 5 歳 5 ヶ月時の「死」の理解①

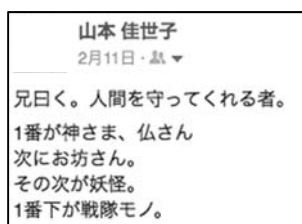


図 20 5 歳 5 ヶ月時の
死の理解②

の後も何度も読
んでほしいと持
ってきた。亡く
なった後、木の
神様になって遺
されたものを守
ってくれるとい

うエピソードが、写真絵本であるが故の
リアリティをもってアキラに迫ってき
ていた。そしてこの考え方は、それまで
に彼が育んできた死生観にマッチし、そ
れを強化するものにもなっていること
が、図 20 からわかる。

では、死の絶対性（普遍性）を現在のアキラは理解できているのかということ、6 歳になっ
たばかりの際に以下のような対話をした（Facebook への記載はなし）。

母「A ちゃん、お母さんいいひんからなあ」

兄「なんで？家出したん？」

母「わからへん。家出したのか、死んじゃったのか」

兄「え？なんでまだ年取ってないのに死ぬの？」

母「病気とか事故とかで若くても死んじゃうことはあるやん」

兄「・・・きっと家出したんだよ！」

父子家庭の知人について、母親がいない理由を聞かれたが、死別か離別かわからないため、
その通りに答えたところ「え？なんでまだ年取ってないのに死ぬの？」という言葉が驚きと
ともに返ってきたのである。そして、「家出に違いない、死んじゃったわけではないはずだ」
と自らに言い聞かせるように「きっと家出したんだよ！」と言うのである。自身の両親と同
世代の人が身近に亡くなることがあるということを認めたくない気持ち、死の絶対性を認
めたくない揺れる気持ちが表れている。

3.4 アキラの死生観の発達

さて、先の図 19、20 の対話から、アキラの死生観の一端が見て取れたと思う。アキラは
父の持つ絵本『地獄』を幼いころから両親に読んでもらっていて、三途の川や奪衣婆、閻魔

さまに親しんでいた。3 歳 10 ヶ月の折にアジサイで知られる矢田寺を訪れた際に閻魔堂をお参りした時の対話が図 21 である。その日のお昼に親が飲んでいたコーヒーをこぼしてしまったこと、けれどもきちんと謝ったことを閻魔さまに報告しているのである。悪いことをしたら、閻魔さまに地獄に連れていかれることを恐怖心をもって受け止めている。図 22 も絵本『地獄』にまつわる 4 歳時のエピソードである。絵本の周りに消防車のミニカーを集

山本 佳世子さんが写真を追加しました
2014年7月1日・iOS・嵐 ▼

矢田寺の閻魔様の前で、報告しました。
「コーヒーこぼしたけど、ちゃんと『ごめんなさい』って言いました」。
3歳児は学びました。
「悪いことしても『ごめんなさい』って言えば、閻魔様に地獄に連れて行かれへんやんな」と。
そうね。そうだといいね。

図 21 3 歳 10 ヶ月時の死生観

山本 佳世子さんが写真を追加しました
2014年10月19日・iOS・嵐 ▼

写真。とってもわかりにくいですが。
『地獄』の絵本の上を消防ヘリコプターが飛んでおります。はしご車やタンク車も近くに集まっております。
兄「地獄の火を消してんねん。火が消えたら、お花が咲いて、極楽になんねん。」

図 22 4 歳 1 ヶ月時の死生観①

山本 佳世子 ▼
2014年10月15日・嵐 ▼

五日前。階段から落ちた兄。擦り傷とたんこぶ。軽傷。

①夜、布団の中で、母は語る。
大怪我しなくてよかったな。
神さまが守ってくれてんな。
神さまはなんでも見えるから、階段から落ちたときに「あっ！」って思っ
て、大怪我にならないように助けてくれたんよ。
いつも神さまのおうち（神社）の前を通るとき、パンパンして、「こんにち
は」ってご挨拶してるやる。
だから、守ってくれてんよ。
また今度、神さまのおうち行ったら「ありがとう」って言おうな。

②兄は「今度の休みに奈良公園に行こう」と言いながら、問う。
兄「奈良の神さまは、日本が全部見えるの？」
母「そうね。でも広すぎるから、奈良公園の神社の神さまは特に奈良のこと
よく見てるよ。うちから一番近くの神社の神さまは、一番、僕のことよく見
てくれるよ。」

③本日、氏神さまの秋祭り。母、また語る。
今日はうちから一番近くの神さまのおうちのお祭りだよ。階段から落ちた時
に助けてくれてありがとう、って言いに行こな。

④境内で紙芝居。演目は「かさこ地蔵」。母、更に語る。
おじいちゃんがお地蔵さんに優しくしたから、おじいちゃんたちが困った時
に、お地蔵さん助けてくれたな。僕も階段から落ちた時に、神様にいつも
ちゃんとパンパンしてご挨拶してたから助けてくれたな。これからも神さまと
かお地蔵さんには優しくしよな。

⑤ちゃんと氏神さまにお礼とご挨拶を済ませ。

図 23 4 歳 1 ヶ月時の死生観②

め、地獄の火を消そうとしているのである。「火が消えたら、お花が咲いて、極楽になんねん」とは、地獄の恐怖と闘う豊かな想像力を感じさせるものである。

一方で、お散歩圏内に多数の寺社仏閣があり、アキラは春日大社では小さな末社も含め、社の前を通る時は手を合わせてご挨拶をすることを両親とともに実践してきた。そして神社は「神様のおうち」とであると教えられ、姿を見たいということ、母親から「神様は恥ずかしがり屋さんだから外に出てきて姿は見せてくれることはないけれど、みんなを守ってくれている」と聞かされてきた。この「神々に守られている」という感覚が、先の『おばあちゃんは木になった』の写真絵本にまつわるエピソードでも表れているが、この死生観はアキラの中でいかにして形成されていったのだろうか。

4 歳 1 ヶ月時のエピソードが図 23 である。家の階段で足を踏み外し、2 階から 1 階に転落、しかし大した怪我もなかったことから、母が「いつもちゃんと神様にご挨拶してるから、

神様が守ってくれてんよ」と語るのである。そして氏神さまのお祭りで助けてくれたお礼とご挨拶をしている。更に、紙芝居で「かさこ地蔵」の演目をしていたことから、「おじいちゃんがお地蔵さんにやさしくしたから、おじいちゃんたちが困った時に、お地蔵さん助けてくれたな。僕も階段から落ちたときに、神様にいつもちゃんとパンパンしてご挨拶してたから助けてくれたな。これからも神さまとかお地蔵さんには優しくしよな」と母は語りかけている。日々のお散歩の際のお参り、実際に大けがしてもおかしくないのに大した怪我もしなかったという体験、かさこ地蔵の物語が合わさって、「守ってくれる神仏観」が実感として身に付いていったのではないだろうか。

それが窺えるのが、図 24 と図 25 のエピソードである。自宅からそう遠くない場所に火葬場があり、たまに宮型霊柩車を目にすることがある。4 歳 4 ヶ月時、アキラが友人と遊ん

山本 佳世子
2015年1月18日・㊟▼

友人親子と遊びに行った兄。前回と同じあたりで再度、宮型霊柩車に遭遇し、友人親子に霊柩車について説明したらしい。
日く。神様のおうち（神社）で神様がみんなを守ってくれるように、死んだ人を守るために、霊柩車にはおうちがついている。

図 24 4 歳 4 ヶ月時の死生観

山本 佳世子さんが写真2件を追加しました。
9月7日・㊟▼

夜、また雨が降ってきて、明日も一日雨のよう、という話をして。台風が日本の近くに来てるとい話をして。
兄「奈良には台風いつ来るの？」
母「奈良には来ないかなあ。奈良に来ることはそんなにないよ。日本に来ることはあるけど、奈良から遠いことが多いかなあ。奈良は台風もそんなに来ない（数年前に奈良南部がえらいことになったけど）し、海もないから津波もないし、地震も少ない（と思い込んでる）しね」
兄「奈良には神さまがいっぱいいるからね！大仏さんもいるし！」

図 25 6 歳 0 ヶ月時の死生観

山本 佳世子
2015年8月25日・㊟▼

寝かせつけに「かさじぞう」を読む。
兄「いいなあ。僕もこんなことしたい」
母「お地蔵さんのお祭り（地蔵盆）の時、ちゃんとお参りしたら次の日に野菜とかお菓子とか、お地蔵さんにもらったやん」
兄「！！。これと一緒にか！ほんまや！」
兄「誰が持ってきたん？お地蔵さん持ってきたん？」
母「いや、お地蔵さんのところにいたおっちゃんやな。お地蔵さんの代わりに、お参りに来た人みんなに分けて配ってくれてん」
兄「お地蔵さんが持ってきてくれたらよかったのに。なんでおっちゃんなん？」
母「うーん、なんでやる。めんどくさかったんちゃう？で、おっちゃんに頼んでん」
兄「そっか、そやな。僕もめんどくさい時あるもんな」
お地蔵さんごめん。めんどくさがりで納得させてしもた。。。

図 26 4 歳 11 ヶ月時の死生観

でいて宮型霊柩車に遭遇した際、友人親子に霊柩車について「神様のおうち（神社）で神様がみんなを守ってくれるように、死んだ人を守るために霊柩車にはおうちがついている」と説明したというのだ。6 歳になっても、台風が奈良を避けていったことについて「奈良は神様がいっぱいいるからね！大仏さんもいるし！」と自ら言うのである。神仏に守られているということが、アキラの実感として身に付いていることが窺える。

そしてだからこそ、アキラは神仏を大切にし、地蔵堂の前を通り過ぎる際には必ず簡単にでも手を合わせるようにしている。この神仏を大切にする態度もアキラは日常の経験と母との対話を通して内面化させていている。それがよくわかるのが図 26 の対話である。4 歳 11 ヶ月で絵本『かさじぞう』を読み、お地蔵さんに食べ物进行いろいろともらったおじい

さんを羨むアキラに対し、母が地藏盆でのおさがりに野菜やお菓子をもらった経験を結び付けて語るのである。それはアキラにとって、本当にお地藏さんにお礼をしてもらったという実感を伴ううれしい発見となっている。

一方で、同じ 5 歳になる少し前の地藏盆で地獄の紙芝居を観たことがきっかけとなり、地獄への恐怖は大きなものになっている（図 27, 28, 29）。幼いころから絵本『地獄』に馴染み、なまじ知識があったために、想像力の発達と理解の深まりから、それまでは単なる物語であった「地獄」が自身の問題として襲ってきたのである。「死んだら地獄に行くことになったらどうしよう。僕は極楽に行きたい」という切実な思いが伝わってくる。

ところが、この地獄への恐怖を伴う他界観も、年齢に伴って変化してきている。それがわかるのが図 30 である。5 歳 8 ヶ月時、友人の祖母が亡くなったため、毎朝の地藏堂の前を通り過ぎる際のお参りにおいて「極楽に行けますように」とお願いしていたのだが、そこで「極楽はずっと同じところにいて飽きてしまう」ということに気づき、「それよりは生まれ変わるのがいい」と言うのである。極楽往生するよりも、六道輪廻の方が

山本 佳世子さんが写真2件を追加しました。
2015年7月24日・火

本日、奈良中が地藏盆。
発見したこと1。地藏盆って子ども向け行事と思ってたけど、過疎化と少子化が進むと福引きの景品も大人向けになる。
発見したこと2。兄が地獄のお話を半泣きになるくらい怖がるように。年齢と共に想像力の発達を実感。
ちょっと大きなお地藏さんで、「地獄と極楽巡り」な紙芝居。下手に地獄の知識を、これまでに蓄えてしまったことが災いしたのか。自身のちょっとしたイタズラやワガママ、小さな嘘が思い出され、死んだら地獄に落ちるかも恐怖に苛まれる。いろんな小さな嘘やイタズラを白状してくれました（笑）そして帰る際、お地藏さんに何度も本気で「死んだら極楽に行けますように！」とお願いする。
本人は怖くて仕方がないのに、母は彼の成長を実感し、感慨にふける。かわいそうな話です。

図 27 4 歳 10 ヶ月時の死生観①

山本 佳世子
2015年7月24日・火

今日は氏神さまのお祭り。
氏神さまにお賽銭入れて、手を合わせ。
「僕が字を読めるようになりますように！」
・・・昨晩から、字が読めるようになることが喫緊の課題となった兄です。というのも。地獄の紙芝居で、六道の辻の絵。
【地獄←→極楽】と分かれ道に立て看板が。
今朝、今にも泣き出しそうな顔で「僕、字読めへんからどっちが極楽かわからへん。地獄に行っちゃったらどうしよう（泣）」とのたまう。
そして、これまで頑として読みたがらなかった「あいうえお絵本」を取り出してきて「今度のお休みにこれ読もう」と。
いやはや必死です。
怪我の功名？果たしてこれで字を読めるようになるのでしょうか・・・。

図 28 4 歳 10 ヶ月時の死生観②

山本 佳世子
2015年7月26日・水

地獄への不安に苛まれる兄。
兄「閻魔さまはどこにいるの？分かれ道の前？後？横？」
→ごちゃごちゃ調べて三途の川の後、分かれ道の前。で決着。あってるのか！？
兄「三途の川どうやって渡ればいい？」
母「極楽行く人は橋で渡れるよ」
兄「橋が細くて落ちちゃったらどうしよう。僕、極楽に行きたい」
兄「分かれ道でどっちに行けばいいかわからなかったりまちがえちゃったらどうしよう？」
母「お迎えが来てくれるから大丈夫」
兄「どうやってお迎えの人わかるの？お母さん先に行つていい」
母「地獄になっても、弟くんとか子どもとかまだ死んでない人がお地藏さんとかに一杯お参りしてくれたら、極楽に行けるようになるんやって」
兄「神様とか誰でもいいの？」
母「うん、そうやで」
兄（ほっ）
兄「死出の山って一人で歩くの？どうしよう。若草山と同じくらい？一人嫌だから僕、弟くんと同じくらいに死にたい」
・・・ちなみにこの会話全て、ここ二日間、脈絡もなく突如問いかけられ、自分で言いながら半泣きになるのです。
母「僕いい子やから大丈夫やで」
兄「でもたまにわるいこととかしちゃうことある。。。」

図 29 4 歳 10 ヶ月時の死生観③

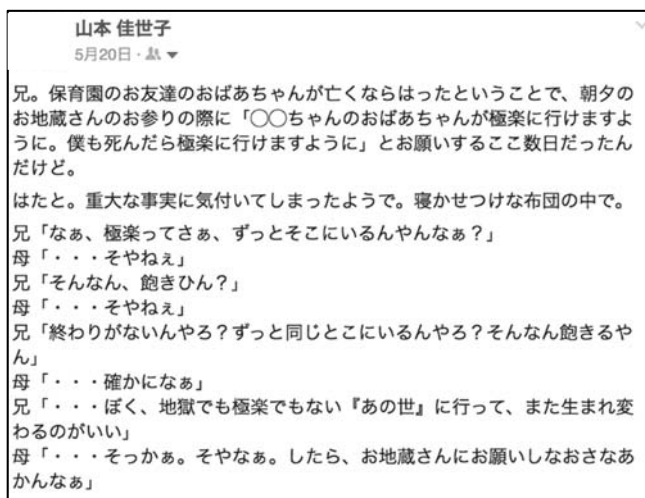


図 30 5 歳 8 ヶ月時の死生観

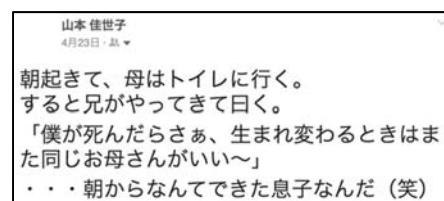


図 31 5 歳 7 ヶ月時の死生観

いいのではないかと、というアキラなりの気づきである。同じころ、「僕が死んだら、生まれ変わる時はまた同じお母さんがいい」と口にしており

(図 31)、極楽往生の他界観とともに、「生まれ変わる」という他界観を身

に付けていることがわかる。

さらに、6 歳 3 ヶ月になり『これからどうしちやおう』（ヨシタケシンスケ、ブロンズ新社、2016）という絵本に出会った。死んだおじいちゃんがつけていた、死んだ後に行く世界についてのノートを孫が読み、死んだらどうなるのか思いめぐらせるという物語である。地獄と極楽、様々な神さまが描かれている。アキラは、これまで目にしてきた地獄と極楽は「昔の地獄と極楽」であり、「現代の地獄と極楽」はこの絵本のようなものかもしれない、という嬉しい気づきを得ている。

4 考察：いかに死生観を育むか

以上のアキラの事例からは、死生観というものが繰り返し触れる絵本やアニメの世界と、実生活における関連する経験と、それらを共有し「この世ならぬ世界」や「この世ならぬ存在」との関係において意味づける親の三者の融合によって育まれていることがわかる。

絵本『地獄』で慣れ親しんでいた閻魔さまが、単なる絵本の世界の存在ではなく、実際にお寺に祀られていること、そして同じエピソードがよりリアルに別の紙芝居『地獄と極楽』でも語られていることでアキラに地獄と極楽の世界観が「本当のこと」として認識されていた。同じエピソードが複数の絵本や紙芝居によって語られ、実際に像や絵画で表現されており、様々な媒体を通して繰り返しその世界観に触れることで、その世界観を自らのものとして内面化させていっていることがわかる。

なお、親がいうことを聞かない子どもを叱る上でスマートホンの「鬼から電話」というア

プリが人気だが⁹、アキラの家庭においては親がアキラを叱り、いうことを聞かせるために特定の場面において地獄や閻魔さまを持ち出すことはない。そのため、「今ここ」で閻魔さまに怒られたり地獄に連れていかれたりするわけではないので、「死」についての理解が浅かった時期は地獄や閻魔さまへの恐怖は少なかった。それが「死」の理解が進むことで、その意味するところを自ら想像できるようになり、恐怖が増していったのであろう。そして引用したエピソードのように、アキラ自身が「今、叱られないために」ではなく「将来、地獄に行かないために、極楽に行けるように」自身を律するような形で「良い生き方」を志すようになるのである。親も地獄の恐怖に震えるアキラに対し、地獄や閻魔さまの存在を否定することで落ち着かせようとするのではなく、その世界観を共有し、肯定したうえでアキラが「良い生き方」をしているから大丈夫だと落ち着かせようとしている。そのように意味づけられ、共有されることで、この世界観が強化されていっている。

そして地獄や閻魔さまへの信心は、「閻魔さまがアキラのことを見ているのと同じように、お地蔵さんや神さまもアキラのことを見ている」という形で、「神仏やご先祖さまが守ってくれる」という死生観とつながっている。「転んだけど怪我をしなかった」という実体験を「神様が守ってくれた」と母親によって意味づけられ家族で共有し、お地蔵盆のおさがりを「きちんとお参りしたからお地蔵さんがお礼に持ってきてくれた」と母親が意味づけ家族で共有する。そして神仏やご先祖さまが生きているものを守ってくれるという感覚は、絵本『かさじぞう』や写真絵本『おばあちゃんは木になった』といった複数の絵本によって繰り返し確認され、強化されていくのである。絵本で得た知識と、母親によって意味づけられた経験による実感が結びつくことで、実際に近所の地蔵堂では必ず手を合わせるという行動に現れるまでに、自らの死生観として内面化されていっている。さらには台風があまりこない奈良を「神様に守られているから」と母親によってではなく、自ら意味づけるに至っている。なお、写真絵本『おばあちゃんは木になった』のように母親以外の人（この場合は絵本の著者）によって「死者に守られる」ことを写真というリアルな媒体を通して語られることも、アキラにとっては大きな意味を持っているのではないだろうか。様々な媒体、様々な人を通して繰り返しその世界観に触れることで、その世界観を自らのものとしていっていることがわかる。

とはいえ実生活における経験だけ、あるいは絵本の読み聞かせだけでは死生観の生成につなげることは難しいであろうこともこれまでの議論から明らかになったのではないだろ

⁹ メディアアクティブ株式会社によるスマートホン用のアプリ。「そんなことしてたら鬼が来るよ」と親が言うような場面で、本当の着信のようなリアルな着信画面と通話画面が表示され、音声流れる。子どもが言うことを聞くと評判となり、話題となっている。

うか。本稿の最初に確認したように、井藤（2008）は、故人との関係性によって役割を変化させながら、死生を巡る慣習的な営みに繰り返し参加することで、参加する人々で共有される価値体系、すなわち死生観が生まれると指摘している。現代日本社会において、井藤が事例に挙げた離島の村落共同体のように実生活において繰り返し死生を巡る営みに参加することは決して多くはない。アキラの地域でも氏神さまのお祭りや地蔵盆といった伝統行事が残ってはいるものの、それらは子どもたちにとっては「楽しいお祭り」でしかなく、その行事の意味や背後にある死生観・世界観が参拝者に認識され、共に参加する友人等と共有されているわけでは必ずしもない。地域に形骸化したり意味が失われたりしながらも残っている伝統的な営みに単に参加するだけでは、死生観の生成には不十分であろう。絵本だけでも、死別の悲しみを想像することは発達に応じてできるようになっても、「この世ならぬ世界」や「この世ならぬ存在」への実感を伴う理解はリアリティに欠けて難しいのではないだろうか。地域にかろうじて残る伝統的な営みに参加し、かつ動物の死といった物理的な死の現実も発達に応じて見せながら、それを親が意識的に死生にまつわる形で説明し、あるいは意味づけをする。そして絵本やアニメといった媒体も活用することで、絵本等も含めた死生にまつわる営みを「繰り返すこと」が可能となり、家庭という最小単位の共同体において共有されることで、かろうじて死生観の生成に繋がっているのではないだろうか。それは伝統的な営みが形骸化していてもなお、長年に亘って蓄積され耐えてきた死生観を、絵本や親による意味づけによって補完するものであり、伝統の力の大きさを感じさせるものでもある。

5 おわりに

現在、6歳のアキラはフィクションとノンフィクションの違いを意識するようになってきている。また、キリスト教の教会という「西洋のお寺」の存在も知り、しかし「神様が一人」という一神教の世界観は理解できずにいる状況である¹⁰。今後、アニミズム的世界観、多神教的世界観を「フィクション」として離れていくことになるのかはわからない。アキラはまだ実際に身近な存在の死を経験したこともなく、身近な人の死に接したときに彼がそれまでに育んできた死生観がどのように作用するのかもわからない。保育園と家族という限られた社会、奈良の旧市街地という限られた空間で生活してきたアキラが、小学校に入学し社会が広がり、より多様な、特に世俗的な価値観に触れることになることで、死生観にも変化

¹⁰ 西洋では、妖精や妖怪はいても神さまは一人だという母の説明に対し「神様ひとり？は！？」とまったく理解できない様子であった。むしろ、それ以降「奈良には神様が沢山いるから（より守られている）」と数の多さを強調するようになっている。

がみられることが予想される。死生観の生成と継承を考える上でもこれらのことは課題である。

また、家庭における死生観の涵養においては、家庭内や夫婦間である程度共通した死生観を持っていること、それが地域に残されている伝統的な価値体系と合致していることが必要条件となってくるかもしれない。子どもの死生にまつわる問いに親がごまかさずに向き合い応えられることも求められる。学校や地域といったより大きな共同体でこのような死生観の生成と継承を行うことの難しさも一方で垣間見えるものである。

それでも本事例からは、現代日本社会の一地方都市において、家庭という限られた共同体において、実生活及び絵本やアニメの世界を通して死生の営みに繰り返し触れ、そこに含まれる価値体系が親という他者と共有されることで、「いのち」や「死」の理解の発達に応じて死生観が形成される可能性が見て取れたのではないだろうか。幼児期に育まれた死生観が、青年期、更には成人期においてどのように変化し、作用していくのか、今後さらなる検討を深めたい。

引用文献一覧

- 井藤美由紀（2008）『『生と死の教育』を考える——生活に根差した伝統的死生観から』『ホスピスケアと在宅ケア』16巻1号、29-38頁。
- 碓井真史（2005）「子どもの死生観の理解と指導」有村久春『「命を大切にする教育」をどう進めるか』、教育開発研究所、36-39頁。
- 碧海寿広（2012）「変わりゆく葬儀・墓」高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編『宗教と社会のフロンティア』、勁草書房、151-169頁。
- 岡部健・相澤出・竹之内裕文（2009）「在宅ホスピスの現場から——臨床死生学という課題」岡部健・竹之内裕文編『どう生き どう死ぬか』、弓箭書院、13-27頁。
- 黒田恭史（2003）『豚のPちゃんと32人の小学生——命の授業900日』、ミネルヴァ書房。
- 竹之内裕文（2009）「死すべきものとして生きる」岡部健・竹之内裕文編『どう生き どう死ぬか』、弓箭書院、95-116頁。
- 種村エイ子（2000）「総合学習と学校図書館——『いのちの授業』の実践をつうじて」『図書館学』76巻、8-15頁。
- 鳥山敏子（1985）『いのちに触れる——生と性と死の授業』、太郎次郎社。
- 中井珠恵・杉江礼子（2010）「死生観を涵養するための教育現場へのサポート——緩和ケア

の専門性を活かして」『緩和ケア』20巻、210-215頁。

Nagy, M. 1948. The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, 73: 3-27.

松尾通成（2005）「絵本からいのちのつながりと尊さを学ぶ——ワールドスタディーズセンター『教え方・学び方教室』の実践」『開発教育』51巻、42-44頁。

光岡攝子・大村典子・堀居理司・笠柄みどり（2003）「絵本の読み聞かせによるデスエデュケーションの試み」『小児保健研究』62巻5号、569-575頁。

柳田邦男（2011）「大震災後、変容する死の課題」『文藝春秋 SPECIAL』5巻4号、8-15頁。

Cultivating a view on life and death during early childhood: A case of parent–child dialogue

Abstract

Today, views on life and death are lacking. Therefore, life and death education is needed to cultivate these views. Life and death education in schools is expected as difficulties can be easily pointed out during that stage. However, life and death education among a community and at home is also required. A major issue hindering this is that ways to cultivate a view on life and death, which includes a view of the transcendental world, according to children's developmental stages, are unclear. In this study, dialogues between me and my 6-year-old son, which I have shared on my Facebook account as well, are examined to obtain suggestions regarding how a parent can cultivate a view on life and death during early childhood. Thus, I propose that when everyday life experiences related to life and death and those in the world depicted in picture books are connected, sometimes intentionally by one's parents, one frequently experiences life and death issues. When one shares such experiences with one's family, one's view regarding life and death is cultivated as per one's developmental stage. Considering this, I recommend that both parents share a similar view on life and death and that the view should also be similar to the traditional view of their community. Moreover, I also suggest that it is necessary for parents to respond to their children's questions about life and death sincerely.

Keywords: life and death education, view on life and death